

子ども・青年の発達と教育

限らない発達可能性に依拠し 豊かな理論と実践の展開を

飛田 登美夫

はじめに

今年度も、小・中・高・大の教員を中心にして、約二〇名の参加者があつた。その中には、定時制高校PTA会長さん、養護教諭、更に、YMCA英語・スポーツ専門学校教育論の方もおり、その多様な幅広さが子ども・青年の発達と教育を考え合う上で、本分科会の貴重な財産であると共に、学びを深める原動力となった。最初に、共同研究者の内島貞雄氏より、本分科会は不登校、登校拒否も含めて「幼小から青年期までを貫いて発達を見通す」という視点で、子ども・青年の育ちを相互に関連付けて考えるという作法を大切にしてきたし、その必要性を参加者に共有されてきたことを報告。その上で、ここ数年の分科会の流れと、近

年の実践的・理論的課題が提示された。

- ① 小学校での「学級崩壊」状況の報告が一〇年近く続く中で、「激情を示す言動」「キレル子とキレル行動の質的变化（生命の危険も加わり）」が見られるが、担任や学年だけの問題とせず、個々の生徒の躰き等を発達上の課題という視点で捉えたり学年課題と位置づける前進的な取り組みが広がっていること。
- ② 多様な問題を抱えた子どもたちの言動の中に、「不安感」や「困り感」が存在するが、そうした感覚・感情を共有する大切さが確認されてきたこと。
- ③ そのような子ども理解を軸に、保護者とながり、近年「クレイマー」と揶揄される保護者自身が、生育歴の中で丁寧なケアを受けてこなかったのではないか等の背景を探りながら対応を豊かにすること。
- ④ 高校での仲間を認め育ち合う実践や人間として豊かに生きる授業実践と合わせて、寄宿舎での思春期の支援と成長等の「特別支援教育」の優れた取り組みが広がっていること。こうした内島氏の報告と問題提起を受けて、報告と討議に入った。

一 レポートの概要

(1) 保護者の要求とつながりの回路

石狩市立小学校 沓澤美春さん

《保護者との関係への教え》大学の教えや教科書には、保護者との関係のあり方として「三者の連携・連絡を密に」が一般的で勤務した学校長も同じであった。子どもの様子を保護者に伝えることは、教師の大切な仕事。それが、子どものよりよい成長に繋がり、保護者にも安心を与えるものと思っていた。

《希望に満ちた臨時採用期間》理想に夢ふくらませ教師として働いた。四年生担任。応援してくれる保護者が多かった。毎日が輝き楽しく、土・日が寂しく「早く月曜日にならないか」と思った。子どもの少しの変化も「とても喜ばしいこと」として電話やお手紙、学級通信で繋がりをもっていた。保護者は「先生のお陰です」と言ってくれ、本当に「教師になって良かった」と実感した時だった。

《苦闘の中で粘り強い教育的営み》正採用2年間く正採用され3年担任。自分の至らなさや新採用ということからか教師としての信頼度はゼロ。初めての参観日の懇談会

の時は、不満のシャワーを浴びた。「ちゃんと子どものことを見ているのか」「子どものことを全て把握してください」などなど。針のむしろとはこのこと。落ち込み自分を責めた。女子16名、男子8名のためか女子のいざこざも多く電話も多く鳴った。鳴るのが怖く「連絡を密にとる」とへの迷信は捨てた。次年度も3年担任。男女共18名で活発なクラス。「死ぬ」という言葉が横行し、毎日毎時間、殴り合い、言い合いのケンカが勃発。保護者への電話は嫌だった。電話では感情が伝わらず、意図と違う受け取られ方もあり、直接合ってお話するよう努めた。でも、かかってきた電話は拒めない「てめーこら！ふざけんな！今から行くぞこら！」電話口で怒鳴られたことも。

《逆境を通して教師としての学び》担任生活2年間の悪戦苦闘。子どもは自分に都合が悪い場合など家では事実をねじって伝えることも。保護者から「先生のお考えは○○なんですわね。私の考えとは違います。私が教師ならこうします」又、「うちの子は、入学してからずっと悪者と言われてきました」「先生もその一人だと今思っています」等々。子の振る舞いを客観視できない保護者も増えていると。でも、沓澤さんは保護者との切り結びを深める。保護者に真実に目を向けて欲しい。「自分が保護者に嫌われる」ということより、子どもの未来を真剣に一緒に話したかった。

子どもが醸し出す素晴らしさに気づかない保護者にも「そう言いますけど、今日の〇〇さんのやさしさ知ってますか。お友達のことを、こうして守ってあげていたのですよ。素晴らしいやさしさを持つている子なんです。変わろうとがんばっているんです」渾身の力を込めて言った。同時に泣いた。「学校はこの子の敵ではない」ということを知っていた。学校は保護者も泣いていた。そして、子育てについて語ってくれた。私はこの日を忘れないと思う。保護者の子どもへの愛は、何にも変えられない宝だ。子どもの痛さは、保護者の身を切るほどの痛さだ」と。

《今後の課題と展望》更に、杏澤さんは、教師は現状でしか子どもを見ることができない。子どもの歴史、家庭での歴史を知らない。だから、時に「どうして子どもの現状を理解しようとしななんだ」「そんなことで電話してくるな」と思うこともある。それが、職員室の保護者批判に繋がることもある。少し前に流行った「モンスターペアレンツ」もそうだ。しかし、そのような保護者たちの裏側には、深い歴史があるのだ。(ケースバイケースではあると思うが) 子どもたち、保護者たちの歴史を感じて教育に向かう姿勢はとても重要なこと。出会った保護者に学んだ。今、なくなりつつある家庭訪問の大切さを実感した。どんな環境で暮らしているのか、子どもと保護者の関係性など、そ

の歴史を垣間見られる貴重な時間でもあるからだ。これは、保護者が単体で構えて学校に来る個人懇談では得られない宝だ。一度は捨てた大学の教えだが、新しい形で理解できるようになった。子どもの個性が様々なように、保護者の個性も様々だ。一人ひとりを見分け、対応を考えなければならぬ。せつかく築いた良い関係も対応を誤ると一気に関係性を崩す。教師の仕事は人の人生を左右させてしまう仕事だ。一人の教師への不信任から、今後、人を信じられなくなることもある。裏切られたと感じる痛みは、消えづらいのだ。ある心のすれ違いを起こした保護者が私に言ってくれた言葉「今は辛くても、子どもが変われば保護者は絶対に見ているはず。その時に先生は評価される」と。最後に、『人は変わるのだ。子どもも、保護者も、教師も。誠実に子どもを愛し、保護者を尊敬していくことで、三者の良き連携を導き、子どもたちのよりよき未来へと繋がっていくのだと考える。』と報告され、教育という営みに立ち向かう姿勢に子育て・教育の原点を再確認させられた。

(2) 子どもの負の心性に気づかされて

利尻鷲泊小学校 福家鉄也さん

《学級の様子》子どもたちは素直で明るく、個性があふれる。やりこたえのある学級。「素直に自分の意見を相手

に伝えることができる子どもたち」だから↓「影で相手のことを悪く言ったりすることはない」と思っていた。しかし、黒板や机に「しね」と書かれてしまう。(毎日ではないが継続的に)

《教師として・担任として》授業内容を変更して、「しね」

という言葉の意味を考えさせた。何でこのような行為をしてしまったのかを考えさせた。↓でも、子どもたちの心に響いているのか?と手応えない指導と自問自答。教師や保護者は↓大事件だという認識。子ども↓大事件?(先生が騒ぐから)↓自分と子どもたちの感じ方にギャップがある。それは何かと、子どもたちの様子を通し考え整理してみる。↓相手に本音を語れない現実がある。なぜ、自分の本音を相手に伝えられないのか?教師側の目からは↓素直に自分の意見を言える子どものはず?↓教師が子どもたちに勝手な先入観を持っているのか?…子どもたちが教師の顔色をうかがった行動をとっていないだろうか?(先生の前では良い子を演じなければいけない)そこらあたりからか?学校と家庭での子どもたちの様子の違い。「学校では良い子。家庭では言うことを聞かない」「家庭では良い子。学校では言うことを聞かない」という状況も…

《子ども同士のつながりは?》大きなケンカが起これない学級↓「一般的に落ちついている学級」↓逆に言えば、

子どもたちは不満をため込んではいないだろうか?遊びの様子を見ていても↓鬼ごっこなどのルールでトラブルが起きて、ケンカにもなるが、最終的には違う子と違う遊びへ↓密度の濃いつながりをさける。表面的な楽しさ。本音を出すのが怖い↓分かりあえる友だちがいらない。

《子どもの負の心性》影で「しね」と書く行為から見えてきた2つの意味①その人に対する悪意②注目されたい。かまわってほしいという気持ち。そして、騒いではくれるが、自分たちのことを本当に見つけてくれない教師。

《しね》という言葉》子どもたちにとって、この言葉はどのような意味を持っているのか?「大人」存在の否定。

「こども」自分たちが使える(知っている)一番の悪口。言っではいけない言葉。人を傷つける言葉であっても、そこまで人を傷つける言葉だという認識はない。福家さんが、最後に「子ども同士が積極的に関わりあう場面が少なくなっている現在、本音で語り合うことは難しくなっている。だからこそ、子どもたちが自分の心を表現する場を教師側が提供する必要がある、悩みはつきないが、今後はたくさんの方々の意見を参考しながら、子ども理解を深めていきたい」と結ばれた。討議の中で「死ね」等の「攻撃性」を単なる否定ではなく、そこを切り口として実践を深めることが提起された。

(3) 「理想」から、「子どもの今」を出発点に

千歳市立小学校 高橋公平さん

学生時代から「教育研究サークル」に所属し、作文の会・日生連サークル・道民教で学びながら江別から千歳に移動して2年生担任。

《こんなに子どももって違うんだあ》く子どもと向き合いたくなかった1年間く子どもたちと出会った初日、「あれ、2年生って、こんな感じだったっけ？」前任校の2年生との違いを感じてしまう。赴任する前に、ある先生から「その学校のあたり。特別支援の必要性わかるよ」という言葉を贈られていたので、このことか：と感じつつ、新しい学校、職場、地域、そして新しい子どもたちと何も分からなのまま、手さぐりでの1年になる。そして次の年、初の高学年6年生担任。この学年は、5年生の時に大暴れした学年。立ち歩きや私語が止まず授業が成立しない。パソコンの鍵を壊してこもる。非常階段からの脱走。屁理屈をこねる。落書き。書いていくだけで気が滅入るような状況。7月の宿泊学習には、14人の先生方が応援に行くなど。そして4月。子どもたちとの出会い。授業中の私語。集団としての意識のない行動の遅さ。他人の批判ばかりで優しさの感じられない言動。担任として、何とかしなければと苛

立ち叱ってばかり。子どもたちとの関係はどんどんギスギスしていく。何より、隣のクラスの先生は子ども達を掌握し、行動も落ち着いてきていた。このことが私を焦らせた。打合せを密に、足並みを揃える努力はしても、いざ子どもの前に立つと、うまくいかない日々の連続。担任への暴言・暴力。子ども同士も同様。どんどん疲弊し、子どもにも隣の担任にも会いたくなくなってしまう。職員室で誰かが話していると「自分のことを」「何か足りない部分が」とさえ感じ最悪。体調も優れず、学校にも職員室にも行きたくない。毎日、疲れ切つて帰ってくる。仕事は山ほど残っている。仮眠を取るつもりで布団に入ると子ども達の夢を見る。疲れはとれずに朝が来る。この繰り返し。毎日。秋頃から、力を込めガツガツいくより力を抜きゆったり接する方が良い状況につながる事に気づき対応を変えた。しかし、隣の担任とのギャップは広がるばかりで「自分はこの子どもたちのことを諦めているのでは？」とさえ思うほど。騒々しいままの卒業になってしまった。

《民教で学んできた自分》なのに、こうなのか。「ありのままのその子を受入れ、共感して、寄り添い変容を待つ」子どもにとつて困難な時代だからこそ、私たち教師が持ちたい構え。それを実践できる素晴らしさを民教で学び、感じてきた。これまで民教で出会った先生方はみんなこの視

点を持つていた。そうできない自分はこれまで何を学んできたのか。どんどん自分が悪いように思えて。それでも6年生の子ども達も優しい面を見せたり、指示に納得して動いたり、そんな些細なことで涙が出そうになる。

《そして今年・2回目の2年生》去年のようにはなりたくないという気持ちでスタート。素直な子が多く、去年より教室に向かう足取りは軽い。しかし、やはり一筋縄ではいかない。学校外の研修に行つて、自分を取り戻し気持ちを繋ぐ毎日。とりあえず「子どもといっぱい遊ぶ!」という原点復帰を目標に。自分のやりたい事、信念や想いを貫くには、まわりを納得させるだけの知識や根拠が必要だと最近感じている。そのために、「子どもの今」を正しく見取ること。ビジョンを持ち、近づけるために技量を高めることが必要であり、更に、努力していきたくいと報告された。高橋さんの学級づくりでの困難さや苦しさが伝わってくる。今、経験豊かな先生方の教職離れが指摘されている。また、誠実な教師ほど苦悩や無力感を抱いているとも言われているが、困難な中でも粘り強い取り組みが求められる。

(4) 北地区に生きる子どもたち

稚内中学校 飯田 毅さん

《稚内及び校区内の状況》稚内は大きく4つの地区に分

かれ、稚内中学校は北地区に入り、創立当時の生徒数は1000人を越えており「稚内が始まった地」としての自負がある。しかし、現在は139人で経済状況が厳しい家庭が多く存在する。要保護・準要保護家庭が35.7%であり、飯田さんが担当する学年での「ひとり親」家庭は全校生徒の38%と高い。けれども、子ども達は元気で明るく、不登校生徒もいない。学校内は小さなトラブルはあるが荒れてはいない。それはなぜなのか。

《稚内中学校や地域の取り組み》

○『教師集団の粘り強い指導体制』

教師集団の平均年齢は30代。決して経験豊かな教師ばかりではない。生徒も時として度を外した行動。保護者も一見理不尽な要求をして来る。しかしそんな時でも、事例や要求の背後を探りながら、子どもの話をじっくり聞いて指導したり、保護者にも丁寧に対応する姿勢が自然にできている。一人一人の生徒を見守る視点と全体を見る広い視野を意識して子どもの指導にあたっている。よく当たり前のことを当たり前に行う。これを集団（チーム）で指導にあたる）で行うところがポイントである。

○『北地区児童生徒支援ネットワーク』

平成19年度に、民生児童委員、主任児童委員、保護

司、少年警察ボランティア等の地域の関係者が参加することにより、学校の生徒指導の機能を強化して、日常的に生徒の支援等に対応していく目的で「稚中生支援ネットワーク」が始まり、更に、校下小学校も含めた「北地区児童生徒支援ネットワーク」に発展し、よりひろい視野で支援を進めている。この会議は毎月一回行われその都度活発な意見交換と真剣な話し合いが展開される。

○『地域に目を向ける学校』

保護者との連携を大切にしながら、稚中では地域との連携を大切にしている。例えば「子育て連絡協議会・子ども育成連合会・宝来地区拠点センター」など地域の子育てに関わる施設や団体、そして大人同士のつながりを深め、相互に激励し合う。地域行事へ積極的に参加するなど。

○『校下小学校との連携』

北地区に住む私たちは、中学生だけがよければいいとは思っていない。大切なのは小学校との連携。分掌部長による教育課程に関わる事柄や児童生徒の実態交流。「北地区学校間交流」での小中合同の学び合い。授業での乗り入れの連携。これらが中学生が明るく元気に暮らせる源なのではないかと考える。

《北地区で暮らす子ども達》

Yくん。小学校時代から経済状況が厳しく、冬服も買わず薄着。朝ご飯を食べてこないときは、担任の先生がこっそりおにぎりを渡したり、地道な声かけや仲間との結びつきを強める中で、自己本位の行動が弱まり、優しい気持ちと他人の痛みをわかる生徒に成長。

Aさん。母子家庭で就学指導判定ぎりぎりの生徒で、授業内容はほぼ理解できないが母が大好き。学校祭の「僕の主張」というコーナーで仲間の支持を集め発表した主張文。原文のまま

「ママについて」

私のママはいつも、いつも汗水ながしながら、仕事をがんばっています。私がおちこんでいる時は元気づけてくれたり、「どうしたの？」とそうだんにのってくれたりします。私は小学校のころママがやけどしたりきつたりした時にママのクローゼットに「ママやけどしないでね」とか「手をきらないでね」とかいろいろかいた手紙をそのクローゼットにいっぱいはりました。いまでもそのままです。ママはいつも元気いっぱいだながあってもいつも元気です。私はそういうママが大好きです。ママはいつも、こしいたいとか足いた

いとかいいながらそれでもがんばって仕事をしていきます。だから私たまあにママの足のうらをふんであげたりこしをおしてあげます。つかれているのにいつも学校のあつまりや、クラブのおうえんにもきてくれます。ママは、よく私の赤の時の話しをしてくれます。ちいさく生まれてほいくにはいつていて、ママはまいにちミルクをもってきてくれたそうです。私は心臓に二つも穴があいていました。穴わけんにとじました、けどママは私のことをだいに、だいにそだててくれたそうです。私はいまもだいにしてくれてると思います。ママがぐあいがわるくなつた時は私がかたづけをします。あとすこしママのかんびようもします。私はママにめいわくばかりかけていたのでこんどは私がママを大切にする予定です。私はほんとうにママがすこく大好きです。

《「子育て平和都市宣言」の街 稚内》

飯田さんは、北地区ぐるみの子育て実践は、根底に「子育て平和都市宣言」があると指摘する。稚内ではどの地区も地域との連携を大切にしたり子育て運動が取り組まれ、決して学校だけの問題にはしていない。一人一人の教職員が、知恵を出し合い、力を合わせ、同じ目標に向かって進む。

このことを自覚して教育活動を進めている。また、宗谷教組・稚内中分会の役割も少なくなき、組合員が学校づくりに積極的に関わり、その意義を大切にして実践していると報告された。子ども・教職員・地域の創造的な取り組みに学びたい。

(5) ある定時制高校は今 — 生徒の挑戦、先生の挑戦、そして保護者の挑戦

岡崎 恵治さん

3月、卒業式。格好は様々であるが、卒業生は実に晴れやか一人ひとりが輝き本心に嬉しそう。しかし、この定時制では、入学して卒業を迎えられる生徒は6割〜7割。祝辞の中で「高校卒業は社会人としての必須条件になっています。入学した全員が卒業できる学校になる努力を、保護者も学校も」と思わず訴える。岡崎さんの娘さんは「高校は行かないから」と言っていたが、中卒で働いている先輩たちから「高校だけは出とかないと不利だ」「アルバイトも雇ってもらえないゾ」との助言を受け定時制を選択し入学。この年、入学した生徒は約百人。3年後の今は72%。北海道の平成20年度の公立高等学校の中途退学者は2149人。全日制が1・4%、定時制が10・8%。学年別では、一年生約55%、二年生約28%、三年生約11%。一年の

秋までに教科の単位が切れ、留年を嫌って中退した。と言
う訳で、会長を引き受けた。「全員が卒業できる学校になる」
にはどうするか。生徒の声を聞くのが一番！と7月にPT
A役員と生徒会執行部との学校史上初の「生徒の意見を聞
く会」を開催。そのテーマは「生徒会役員をやろう！と決
めたのは。学校祭でやってみたいことは。学校生活を充実
させるには。」生徒達から「中学までは不登校で、役付き
の機会は無かったので自分を試したい。不登校だったけど
今は頑張っているネ。教室が使えれば、ダンスとか歌、劇
などで参加できる。全日より学校祭の時間が短くもつと楽
しめる企画が出来れば学校来てもつまらないって退める人
を減らせると思う。学校生活で自分の目標を明確にできな
いうちに退めていく生徒が多いので、それを持てるよう学
校にもつと援助してほしい。目標をつかめればみんな退め
ないと思う。定時制だから…という偏見の目がイヤだ！先
生が諦めていると思う。定時制に来た生徒だから無理とか
…もつと信頼してほしい」保護者の共通した感想は「学校
のことや他の生徒の気持ちまで、よく考えている。定時制
という限られた条件の中でも、こうしたい、ああしたい！
と言うものを一杯持っている。先生たちには大変だろうけ
ど、力になってあげてほしい」そして、生徒たちのやりた
い！という気持ちがよくわかったダメだと言うのはおかし

い。PTAとして学校に要望したらどうかと強い提案があ
り、教職員との懇談会を初め5項目の「緊急要請書」を提
出。学校からは「生徒たちがやりたいというものについて
は、原則やらせる方向で検討する」等の回答。結果として、
学校祭も全日の補習授業と重ならぬよう30分遅れで開始さ
れた。また、生徒の要望も実り、例年にない来校者で成功
を納めた。

この定時制は3次募集までして定員を受け入れていた。
「不登校、イジメ、ひきこもり、ADHDやLDの障がい
など、様々な事情のある生徒を支えたいとの思いから、働
きながら学ぶ」と言う既成のイメージに該当する生徒は少
数派。学校は、経済的援助として給食費や諸経費への補助、
30人学級の実現、教育相談専門員の配置等も要望している。
生徒会役員の希望は有志発表が増えること。仲間を見つけ
ること。学校を辞めない。そんな「場」の学校になること。
PTAとして、どのように後押しするか！そこに挑戦する
重要な視点として「子どもの権利」を保障する大人の役割
が実践課題になるとも報告された。資料として「国連子ど
もの権利委員会」第3回勧告から抜粋し指摘。抜粋の一部
(43) 子どもを権利を持った人間として尊重しない伝統的
な見方(50) 親子関係の崩壊が、子どもの情緒的および心
理的充足感に否定的な影響を与える(60) 驚くべき数の子

どもが情緒的充足感の低さを訴えている子どもと親、および子どもと教師の間の関係の貧困(70) 過度な競争への不満が増加しく高度に競争主義的な学校環境が、就学年齢にある子どもとの間のいじめ、精神的障害、不登校、登校拒否、中退および自殺に(71) 過度に競争主義的な環境が生み出す否定的な結果を避けることを目的として、その学校制度および大学制度を見直すこと。討議の中で、日本は国として「子どもの権利」を余りにもサボタージュし保障していないと指摘された。

(6) 専門学校における発達障害への取り組み

Y M C A 英語・スポーツ専門学校 加納 昌枝さん

《ライフスキルラーニングコース》2000年にY M C A 英語・スポーツ専門学校で開設。自信をつけたい、学び直したい青年たちや、学習障がい及びその周辺(L D / A D H D / アスペルガー症候群 / 高機能自閉症等)の青年たちの自立を支援するために、ライフスキルを獲得し、社会自立の条件やネットワークをつくるのが目的。基本方針として、(1)基本的な学力を身につける(2)豊かな人間関係を身につける(3)課題発見・解決能力を養う(4)社会人への準備をする(5)生活自立のための経験を積む(6)ポジティブな人生観をもつとしている。

《ライフスキル》とは(W H O)の「人々が日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処するために必要不可欠な能力」と定義つけた技術で10種類のスキルを提示。①意思決定②問題解決③創造的思考④批判的思考⑤効果的コミュニケーション⑥対人関係⑦自己認識⑧共感⑨情動抑制⑩ストレスへの対処である。

《Y M C A が考えるライフスキルとは》専門学校として社会に戦力となる人材を送りだす責任があり、発達に課題がある青年たちに必要な教育は、資格取得重視の考え方よりも、コミュニケーション能力や社会人としてのマナー、仕事への意欲などを重視することが企業が求めている人材と考え「ライフスキル」に着眼しカリキュラム化している。「より良く生きるために必要なスキル」を学生の現在および将来の健康に深く関わる課題として、トラブルの予防・防止・解決のためにライフスキルの形成を目指している。Y M C A におけるライフスキルの定義はW H O のほかに「基本的生活習慣」「心とからだの健康」「基礎学力(体力も)」が含まれている。

《カリキュラム》は、一般科学、専門科学、選択科目の3つに分かれている。また、個別目標の設定を本人の状態に合わせて入学前に行っている。その際、何の仕事ができるか・作業スピードや正確さを優先させず、日常生活管理(起

床など)や職場の適応(障害受容)など職務遂行を見通しながら授業内容を決定している。入学後も学生の様子を見ながら、保護者の同意のもと変更もしている。年間2回の保護者面談だけでなく、必要に応じて連絡を密に取り組まれている。

《卒業生の進路》自分を知る(自己理解)を図り、自分にあつた進路選択の力を養い、働き続けるための仕事内容の理解、意欲や生活の安定、体力、相談する力等、様々な条件の獲得を目指している。しかし、本人の努力だけで捕らえない場合もあり、近年は福祉的サポートを得ながら働く卒業生が増えている。

《卒業生のフォローアップ》
本コースの卒業後、OB・OG会に入会でき、年6回卒業生が集まりカラオケ、しゃべり場、飲み会など様々な活動を行っている。参加も全道各地からあり、交換や気分転換の場になっている。

《福祉的サポートを通して》
在学中、卒業後もいろいろな困難や問題を抱える生徒達への支援を行い支え続けている。

A. 身体能力や作業能力は高いが、言語による指示を理解できず勝手な行動。卒業後、一般就職するが人間関係でトラブルが多く解雇される。現在は大手スーパーで勤続3年。

B. 相手の感情を理解することが苦手で、かつ、本人特有のこだわりを持つ。そこからいつもトラブルになる。現在はゲームメーカー勤続5年。

《課題として》

福祉的サポートを受けるためには、本人自身の受け止めが必要であるし、公的に認めて貰えないときもある。そのため体制やカリキュラムを一層強化すること。様々な学校と協同して個々の発達課題に取り組める関係づくりの必要性を報告された。

共同研究者の富田充保さんから、「本来的には公的な機関が組織されるべき」としながらも、「現状では、とても貴重な取り組み」と話され、更に詳しく学びたいとの意見が強かった。

(7) 保健室からの発信 —子どもの実態調査報告—

高教組・養護教員部 常任委員会 松本 晶子さん

《子どもの実態調査》実施の理由『子どもの状況が見えない』携帯やネットの普及で子どもの生活の「見えない」部分のウエイトが高くなった。教員免許更新制や教員評価・査定などの導入に対して教職員自身を守ることに力を入れざるを得なかったなどの理由からか、養教の集まりでも、子どもの実態が語られることが少なくなつたように感じ

る。この2、3年は「子どもの貧困」というキーワードが前面に出てきている。それも重要な問題だが、子どもの困難な状況を通して社会や家族の貧困の実相をあぶりだすことに目がいつているのではないか。今、養教の見た子どもの実態を出し合う中で、共通の課題や新しい見方を発見するという作業が満足にできていない焦燥感・不完全燃焼を否定できない。しかし、養教の一人ひとりの思いや経験に依拠した学習や活動という基本に立ち戻るために調査の実施を決めた。

《性に関するトラブル事例》

高校生など若年者の性行動に、深刻な状況が数多く記されている。軽く・無防備に性的関係に飛び込む一方、いびつな男女関係や、望まぬ妊娠・疾病に苦しむ子どもたちは、健康な育ちをしているとは到底言えない。彼らは、身体についての知識や認識、尊重し合える人間関係の学習が未熟なまま、セックスの経験のみを急かす圧力にさらされているように見える。しかも保健室や学校が掴んでいるケースは全体の一部にすぎず、性教育の必要性はますます大きくなっていく。出産に至れば、多くは地域保健とつながれるが、中絶や疾病の場合、そのまま抱え込んでしまう可能性が高く、行為の結果は本人や保護者に任されており、個人責任という名のもとに放置されているに等しい。実際に困

った事態に直面した時に、誰でもが受けられるサポート体制の整備も重要。

《性に関して気になること》

思春期を迎え性や人間関係のあり方に悩むのは発達過程として当然。その悩みを次のステップの栄養にするだけのゆとりを、今の社会は子どもたちに与えていない。内面の成長を無視して性の部分でだけ大人社会の一員に引き入れようとしている。商品化された性が簡単に手に入り、子どもたちがその消費者／商品そのものとして取り込まれていること。養教の願いである、「身体の主人公になつてほしい・対等な人間関係を築けるようになってほしい」が、なかなか実を結ばない。「まつすぐ語れば伝わる生徒も多い」とはいふものの、甘さ・無知ゆえに身体や人生設計を傷つけてしまう現状を憂う意見が大半。また、交際相手の家への外泊に寛容な保護者など、家庭との価値観の食い違いから、養教の考えが子どもたちに響かない困惑も大きい。

《発達障害と思われる生徒の事例》

学習・対人関係がうまくいかない子どもの例が珍しくない。チームや学校ぐるみで対応しているところと、問題が起ころなければ積極的な動きにならないところに分かれている。担任やクラスメートの理解で、楽しく学校生活を送っている例もある。養教は、特別支援コーディネーターと

して、チームを組んで担任らとともに保護者や外部機関との連携にあたっていているケースも多い。

《発達障害に関して気になること》

早い段階での気づき・支援があればその後の困難さや二次障害はかなり防げるはずだが現状はそうなっていない。特に高校では、積み重ねられた劣等感や、社会人としての自立の時期が迫っているというプレッシャーもあり問題も難しくなっており、それまでの対応への疑問や小中学校との連携の不備を嘆く声も多い。特別支援は学校全体で取り組む課題で、そこで養教が果たすべき独自の役割についてはまだ明確ではない。

《調査結果全体から》

保健室で見える子どもの実態をより多くの人と共有することの重要性。子どもは、周囲の色々な立場の人々が手をつないでいなければ育たない。今回の寄せられた事例はそのことを強烈に思い知らせている。保健室からの発信は、単に子どもの声を代弁するだけでなく、子どもを中心にした多様な視点を増やすことにつながる。その中で課題が確認でき、進めるべき道筋も見えてくる。子どもの問題に対し、保健室でやること／学校全体でやること／外部機関との共同で行うことが明らかにできるだろうと報告された。討議の中で、性に関するトラブルの部分で意見は沢山ある

(?)しかし、重たい雰囲気の流れ、問題の深さと重要性を感じた。その中で、「保健室は学校の心臓」という言葉が残った。

二 二日間の分科会討議の中から

基調報告で内島さんから、幼・小から青年期を貫いて発達を見通す学びが深められた。今年には保護者(P・T・A役員)からの挑戦。教師自身の苦悩や葛藤も共有され、教育という営みを支える『悔いと喜び』がどの報告にも包含されていた。そこから、ひとつひとつの実践を、より高め高めるには、どのような補い合いの視点が必要であり、更に、実践上の検証が求められるのか。討議の中で指摘された要点を確認して来年度に繋げていきたい。

◎新自由主義の影響も含めて、保護者自身が大人として、人間としての成長・発達が削がれている。また、「ゆとり」を持つて子どもと向き合えなくなっている現状を、丁寧

に分析し、実践を組み立てていきたい。

◎思春期・青年期の発達に絡めて、高校卒業後の支援する組織の拡充や関連する機関との連携を図ること。合わせ

て子どもたちが主体的に参画し、育ち合う実践を構築す

ること。

◎共同研究者の庄井良信さんも内島さんも、「子育てや教育に関わって、資本主義の国の中でも、日本ほど現場の声を聞かず、専門家の意見を聞かない国はない」と指摘された。このことは、教育の困難さを一層深める危険がある。

◎子どもたちの自己確認（肯定感情）の持ちづらさ、生きる目標の弱さや緊張の回避からの性的トラブル等に対し、どのような援助や発達のだ筋を深めるか。

最後に、例年、司会を務められながら、貴重な報告をしてくださる江別高校の池田考司さん「出会いと対話による授業」と山田守成さん「田舎の生徒、だって悩み多いのです」を分科会の流れの中で簡素化して報告をいただきました。

（元 中学校教諭）